

## 見えない子供たちの現実

# 家庭教師の目



## ほったらかしにされる子供たち

このところ国内外で大変な自然災害が引き起こされましたね。国内では新潟県中越地震、海外ではインド洋の津波：そして今年は阪神淡路大震災から十年という節目の年でもあります。

私にも感慨深い記憶があります。今から十五年近く前、長崎で起きた雲仙・普賢岳噴火の時のこと。当時の新聞に、噴火で家も学校も教科書も失った受験生の母親が、「子供の教育が心配」と話している、という記事が載っていました。私は、ちょうど夏休みだったこともあり、家庭教師のボランティアを思い立ち、百六十人余りの大学生とともに現地入りしたのです。私たちは被災を免れた公民館、お寺や避難していた船の会議室を提供してもらい、子供たちを無料

指導しました。子供たちは大変熱心に勉強し、被災で打ちひしがれていた親たちも喜んでくれました。この経験の中でボランティアにお金がかかることなど色々学ばせてもらったのですが、そこで改めて考えさせられたのが、今、社会でほったらかしにされている子供たちのことです。

被災地の子供たちがあのまま勉強できない状態だったら、さぞ不安だったことでしょう。それと同じように、学校の授業についていけない子供たちは、勉強の世界から置き去りにされてしまっているんです。そして受験どころか、授業を受けることに大変な苦痛を感じている子供たちも多いようです。ところが、親はこのことになかなか気がきません。「その辛さを

乗り越えて、がんばらないとダメだ」なんて思っていたりするものです。しかし、自分自身がフランス語の講義を途中からいきなり受ける姿を思い浮かべてみて下さい。耐え難いものを感じませんか？

しかも子供たちが自分で遅れを取り戻そうと思っても、まず難しいでしょう。今の学校の教科書は、先生から授業を受けないと理解できない内容になっています。そして、学校の先生は、取り残された子供に合わせて授業を遅らせるわけにはいかないのです。

ところが、この子たちがその気になりさえすれば、たとえ受験までわずかとという時期であっても、志望する公立高校に合格することは可能な場合も多々あります。

私の会社では、公立高校入試問題集を出版しているのですが、これを作るにあたって、福岡県の公立高校の入試問題を十五年間に渡って調べてみたんです。すると、例えば英語なら中学で千百単語くらい習いますが、実際に出題されていたのは、たったプリント三枚分だったんです。歴史の年代にしても、試験に出るのはプリント一枚だけ。要はこういう情報を知っていたら勝てるというのが、今の

入試の現実なんです。塾や予備校は、こうした情報を徹底的に教え込んでいます。

それなら塾に行けばいいじゃないか、と思われるかも知れませんが、その費用は決して安いものではありません。だから、子供の教育に予算を使いにくい家の子が落ちこぼれると、もうどうにもならないのです。そして、そういう子供たちは決して少なくないのです。じゃあ、どうするか。私は無料塾が出来ないかと考えています。大変なことですが、不可能ではないと思っています。先生は定年退職された先生たちにお願いを借ります。運営資金は志のある企業に資金援助をお願いする。

これからこのコラムで、家庭教師という立場から子供たちの教育について論じて行きたいと思えます。どうぞよろしく。



文・中村信二

1963年福岡県生まれ。家庭教師派遣で福岡老舗の株式会社日本学術講師会、高校入試問題集のベストセラー「虎の巻」出版の株式会社ガクジュツの代表取締役社長。福岡青年会議所で教育問題調査会副委員長や社会参画推進委員会委員長などを歴任する傍ら、TV、ラジオにも出演。現在、貧しい子供たちのための「無料塾」開設を構想している。家庭教師のご用命はフリーダイヤル0120-41-7337へ